

1997年12月、修士課程一年生だった私は、修士論文のテーマを何にするか、人生最大の決断を迫られていた。ウィリアム・モリスを中心とした中世主義にほぼ心は決めていたものの、そのテーマが今後の研究の方向性を左右することは充分認識しており、なかなか最終決断には至れずにいた。はじめて中世英語英文学会の全国大会に参加したのは、ちょうどその迷いの時期であった。

学会では、概してドラマが起こるものである。1975年の国際アーサー王学会では、「キャクストン版のローマ遠征の挿話は、マロリー自身が書き直したものである」というウィリアム・マシューズ氏の論考が発表された。彼の論は、ウィンチェスター写本の方が著者原稿に近いとする、従来のマロリーの本文校訂を根底から覆しかねないものであった。しかし当時、マシューズは既に他界しており、彼の原稿は代読という形で発表された。以後、彼の未刊の論を巡り、キャクストン版と写本のどちらの方が著者原稿に近いのか、学界では20年以上にもわたり議論が続くことになる。1997年12月に開かれた中世英語英文学会は、その長年の議論に終止符を打つ第一歩となるのである。

成城大学で開催された第13回全国大会では、マシューズの論考が活字になったことを受けて、“Textual Problems of Malory’s *Morte Darthur*”と題したシンポジウムが大会二日目に予定されていた。司会・講師を高宮利行氏（慶應義塾大学）が務め、壇上には野口俊一氏（大阪教育大学）、中尾祐治氏（名古屋大学）、向井毅氏（鳴門教育大学）、そして英国から来日したP. J. C. フィールド氏（University of Wales, Bangor）が登場した（括弧内は当時の所属）。まさにマロリー研究の碩学が集う饗宴／競演である。当時、私が所属していた大学院では、マロリーの『アーサー王の死』の本文校訂・書誌学研究に関する授業が開講されていた。シンポジウムのスピーカーたちは、まさに第一線で活躍する研究者たちである。授業を通してしか知らなかった彼らの肉声をこのシンポジウムで聴くことができる。それを思うだけでも私は少なからぬ興奮を覚えていた。

当然のことながら発表はすべて英語である。おそらく私が初めて聴いた英語の研究発表で、スピーカーたちの息づかいや立ち振る舞い、目にすること耳にすること、あらゆることに訳もわからぬまま感動した。高宮氏の司会進行のもと、野口氏は詳細なマロリーの言語分析を行い、中尾氏はキャクストンがローマ遠征の挿話の改稿に『イングランド年代記』を用いたことを立証し、フィールド氏は本文の分析と同時代の歴史的コンテキストから、マシューズの論を反駁するステマを提示した。舞台からは強烈なオーラが放たれ、各スピーカーが読む原稿は聴衆を圧倒した。実際、彼らの論考はマシューズの論に修正を迫るものであった。いまやマロリーの本文校訂の大議論は学問的総意に至ったと言えるが、その基盤には1997年のシンポジウムがあるといっても過言ではない。

さらにこのシンポジウムは、マロリー研究と初期刊本研究に新しい方向性を示す契機ともなった。それを提示したのは、後に*Review of English Studies*に掲載された向井氏の

ド・ウォード論である。従来のマロリー研究では、キャクストン版とウィンチェスター写本が議論の中心であった。しかし向井氏は、これらにド・ウォード版のきわめて緻密な分析を加え、ド・ウォードがマロリーの本文を組んだ際にキャクストン版以外にも写本を底本として使ったこと、またその写本がおそらくキャクストンが用いた印刷用原稿であったことを論じたのである。この発表原稿を事前に読んだフィールド氏は、この新論にショックのあまり夜も眠れなかったと聞いている。

私自身、議論の詳細については、その時半分も理解できていたか疑わしい。しかし発表を聴きながら、いつしか胸の内に何か沸々と沸き上がってくるものを感じていた。このシンポジウムに参加したことで、中世において、どのようにして本文が確立され、書物という媒体を通して伝播していったのかという問題に、私は、すっかり心を奪われたのである。大学院の授業を通して、漠然と初期刊本研究への関心を抱き始めていた頃でもあったが、新しい年を迎える頃には、私の関心は中世主義から中世の本文研究、書物研究へと完全に移っていた。そして結果的に、修士論文ではド・ウォードの宗教出版物についてまとめ、その後もド・ウォードが刊行した『カンタベリー物語』の本文校訂の問題について取り組んだ。いまや初期刊本・本文校訂研究は私の中心的なテーマであり、あの1997年冬のシンポジウムは私の原点とも言える。

昨今、中世研究を続ける環境は年々きわめて厳しくなっている。時代の潮流のなかで、一研究者のできることには限りがあるかもしれない。しかし、今度は自分が次世代に中世研究の醍醐味を伝えられるよう、微力ながら学会活動を続けていきたいと思っている。

(本稿執筆にあたり加藤誉子さんに多くの貴重なコメントを頂いた。ここに感謝の意を表したい。)